長野大学紀要　第37巻第2号　　21―22頁（47―48頁）2015

（準備研究）

満洲事変の歴史的性格に関する総合的研究

塚　瀬　　進*
Susumu TSUKASE

研究実績の概要

「満洲事変の歴史的性格に関する総合的研究」を目的に、本年度は研究史の整理をおこなった。
その際、平成26年度は「①日本の対外政策との関係からの研究」と「②日本国内のファシズム運動との関係からの研究」についてまとめることを、課題として掲げた。その結果、①、②ともに予想以上の関係文献があること、使われている史料も多いため、平成26年度だけでは網羅的な整理はできないことが明らかになった。そのため、整理の対象を以下のようにやや絞ることにした。

「①日本の対外政策との関係からの研究」については、古典的な研究である緒方貞子『満洲事変と政策の形成過程』と臼井勝美『満洲事変』を重点的に読み、使っている文献、史料の検証をおこなった。検証過程では「日本外交文書」の使われ方について、とくに留意して検証を進めた。緒方貞子の研究は関東軍参謀であった「片倉忠日記」を使い、関東軍、陸軍の動向から満洲事変勃発の経緯、その後の経過を検証した点が大きな特徴だと理解した。臼井勝美の研究は、日本外交文書を丁寧に使い、外務省本局と出先機関のやり取りから満洲事変勃発後の動向、日本外交に与えた影響について検証したした点が大きな特徴だと理解した。しかしながら、どちらの研究も満州事変の推移について、日本側の動向は明らかにしているが、日本側の動向を日本政府内部の状況から説明する方向性が強く、交渉相手の中国の動向を十分には組み込めていないと認識するに至った。

この他に、田中義一外交、幣原喜重郎外交を考察、分析した佐藤元英、種稲秀司、西田敏宏らの研究成果についても検証をおこなった。これらの研究成果が、緒方貞子、臼井勝美の研究をどのように継承し、新たな史料を使い、いかに違った満洲事変像を述べているか検討した。その結果、佐藤元英により田中外交の研究は、これまで満洲事変の前史的な位置を占めたと評価されてきた田中外交の多様な側面を明らかにしている。種稲秀司、西田敏宏による幣原外交の研究は、外交交渉だけでなくより広い視野から幣原外交の特徴を明らかにしようとしている。

「②日本国内のファシズム運動との関係からの研究」については、秦郁彦『軍ファシズム運動史』、安部博純『日本ファシズム研究序説』を中心に検証をすすめた。とくに「十月事件」の原因、影響は満州事変との関係から重要なので、この点を重点に置いて検証をおこなった。秦郁彦は陸軍軍人の間にどのような経緯で国家改造運動が芽生え、拡大していったのかについて検証している。安部博純も陸軍軍人の間で広まったファシズム運動の震源、拡大の要因について考察している。両者はともに、日本国内のファシズム運動の経緯と十月事件の経過については詳細な考察がおこなわれているが、こうしたファシズム運動と対外関係との関連性については、十分に検討できていないことを理解した。

以上のように、平成26年度の研究は研究着手時点での予想とは大きく異なり、「①日本の対外政策との関係からの研究」についての研究成果も網羅的に整理することはできなかった。こうした積み残した点

*環境ツーリズム学部教授

は次年度の研究課題としたい。また、日本側の史料については、外務省を中心とした外交文書、陸軍を中心とした軍関係史料、満鉄が収集した史料、関係者が個人的に記した史料の四系統に大別できることがわかった。今後は研究史の整理を進めるとともに、これら関係史料の収集、分析を進めたいと考えている。さらに中国側の関係機関、関係者が残した史料の収集、分析をおこない、日本側の動向と突き合わせ、より立体的な満洲事変像を構築したいと考えている。